

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業  
終了時活動報告書 (2024 年度採択案件)**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	超広域自治体における地域支援団体間の「交換留学」プロジェクト—貴重な現場の情報共有と新たな取り組み創出のためのしくみづくり
(2) 実施団体名	SHAKE★HOKKAIDO
(3) 実施期間	2024 年 12 月 1 日～2025 年 4 月 30 日
(4) 実施国	日本
(5) 活動地域	北海道
(6) 活動概要	<p><b>①活動の背景：</b> 北海道は超広域かつ超散在地域であること、他地域と比べ共生の歴史が浅いことから、支援者間の横のつながりが薄く、住民によるボトムアップの支援例も少ない。2020 年度以降、文化庁の助成や道の事業などにより各地域に新たな取り組みが生まれつつあるがその知見を自治体間、支援団体間で共有することは困難である。本団体は、各地域の支援者・自治体に道の最新の取組事例を紹介するとともに地域間の情報交換の場を提供することを目的とし、2021 年度からオンラインで行う北海道地域日本語教育シンポジウム（以下、シンポジウム）を開始した。第 3 回である 2024 年度には貴基金の助成を受け、北海道総合政策部国際局国際課（以下、道庁）・JICA 北海道・キャリアバンク株式会社に共催に加わっていただき、オンライン配信に加え、道主要 5 都市（北見市、釧路市、帯広市、旭川市、函館市）にサテライト会場を設けて参加者間の交流を促した。また、オンラインを含む全参加者に、シンポジウム登壇団体のネームカード、道庁と作成した日本語教室 MAP を配布し、道における支援の包括的な情報を届けるとともに、横の連絡が取りやすくなる仕組みづくりを行った。しかし、サテライト会場からは、せっかく集まった対面参加者のために、オンラインのシンポジウムを聞くだけでなく、シンポジウムと連動した会場独自の交流プログラムを設けてほしいとの声が聞かれた。</p> <p><b>②活動の目標：</b> シンポジウムは以下の 3 つを目標とし実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 道内の多文化共生支援者・日本語学習支援者の間で、道内の最新の支援の取組内容とその課題が共有できる場をつくる</li> <li>2. 支援者の間に気軽に情報交換ができるゆるやかなネットワークを構築する</li> <li>3. 地域を超えた交流から共生に寄与する新たな取組が創出される</li> </ol> <p>2021 年度から 2024 年度までは、1, 2 の実現に力を入れてきたが、3 に関わる積極的な働きかけができていなかった。また、上述の通り、貴重な交流の場であるサテライト会場を十分に活用できていなかった。</p>

## 2. 業務実施結果

### (1) 実施した内容

①**シンポジウム内容**:今年度のシンポジウムでは、北海道に新たに誕生しつつあるエスニックコミュニティに焦点を当てた。北海道は非集住地域と呼ばれており、2010年代半ば以降外国人住民が急激に増加したものの、その多くは技能実習や特定技能1号などの在留資格で来日する単身の労働者であった。しかし、現在、江別市から当別町にかけて広がるパキスタンコミュニティ、日高地域、特に浦河町で誕生したインドコミュニティは、家族帯同が可能な労働者により形成されたもので、労働者が女性や児童を伴い当該地域で生活していることが大きな特徴である。人手不足が深刻な地域の就労現場で、家族帯同可能な特定技能2号や技術・人文・国際業務による雇用が進む今、これらの地域で起きていることは、将来道内の各地域で起きうることである。その意味で‘集住先進地域’である江別市・当別町と浦河町の実際を紹介することは意義があると考えた。実際に、シンポジウムの情報公開を始めた10月頃から、NHK、朝日新聞、アルクなど多数のメディアから取材依頼があり、当日は北海道新聞・共同通信社が取材のため配信会場を訪れた。道内外からの注目度も高く、当日は目標の250名を上回る254名が参加した。シンポジウムでは12名の専門家・支援者・当事者(江別市在住のパキスタンルーツの大学生)の話を通じ、エスニックコミュニティ形成の背景と地域の現状を詳細に伝えた。また、地域日本語教育の第一人者であるNPO多文化共生プロジェクト代表・深江 新太郎氏に総括を依頼し、コミュニティを持つ者に私たちができる日本語支援についても考察した。

②**広報**:本シンポジウムは今年度で4回目を迎えるが、毎年50名ずつ参加者を増やすことを目標としている。そのため、道庁・キャリアバンク株式会社・JICA北海道など、全道的な発信力を持つ共催団体を通じた広報を行った。さらに、特に日本語学校や地域の学校に対し強い発信力を持つモンテカルロ商事株式会社に広報活動を依頼した。多文化共生は‘地域の課題’として捉えられることが多いが、本シンポジウムは課題を含めた地域の現状を伝えつつも、それを前向きで楽しいこととして発信することに力を入れている。そのため、今年度も協賛企業であるグリーンズ北見・久恵比寿、登壇団体である道庁・浦河町より地域ゆかりの商品を提供いただき、参加者を対象とする抽選企画を実施し、お祭りのようなムードを演出した。

③**「交換留学制度」**:今年度は、これまでの課題であったサテライト会場における交流の深化、「地域を超えた交流から共生に寄与する新たな取組の創出」という目標達成のため、新たに「交換留学制度」を設けた。これは、異なる地域の支援者間の交流を促すべく、地域の支援者に対し旅費・宿泊費を支援し、他地域のサテライト会場に「留学」してもらうことで、当該地域の支援団体との交流を深めてもらうという試みである。今回、恵庭市、千歳市、旭川市から3名の「交換留学生」が江別市・北見市のサテライト会場に参加した。詳細は(2)で後述する。

④**地域を超えた取組みの創出**:先述の通り、本シンポジウムの3つ目の目標である「地域を超えた交流から共生に寄与する新たな取組の創出」については、これまで取組みが不十分であった。今年度は、これまで同様、事後に、希望者全員に登壇者のネームカード(右図)とSHAKE★HOKKAIDOの活動内容をまとめた冊子を郵送した。さらに、③で述べた「交換留学制度」により、新たな取組みの創出を狙った。また、これとは別に、シンポジウム

後の登壇者間の懇親会、および1月31日には江別市・当別町を、3月19日には浦河町を、本団体および両地域の登壇者が相互視察したことで、両地域の支援者間のつながりが深まり、道内で集住地域を抱える先端地域として、今後、協働的な取組みを行う機運が生まれた。



## (2) 実施成果：

### ①参加者数とアンケート結果

超広域自治体である北海道で、すべての地域の人々がスムーズに参加できるよう、シンポジウムは、キャリアバンク株式会社からオンライン配信した。さらに、対面での交流を求める者、オンライン参加に困難を抱える者のため、JICA 北海道や地域の支援団体の協力のもと、道内主要 4 都市(旭川市、江別市、帯広市、北見市)に、対面で参加可能なサテライト会場を設けた。また、当日参加できない者のために、シンポジウム映像を 2 週間オンデマンド配信した。参加者の詳細および事後のアンケート結果は以下の通りである。

-----  
申し込み者：288 名

当日参加者：254 名(地域別内訳：道内 34 市町、道外 21 都府県、海外 3 地域／参加形態別内訳：オンライン参加 174 名、札幌会場 23 名、江別会場 20 名、旭川会場 14 名、帯広会場 6 名、北見会場 11 名)

オンデマンド映像の視聴回数：442 回  
-----

アンケート結果：120 名回答

Q1. 満足度：「とても満足」78 名(65%)、「満足」40 名(33%)、「普通」2 名(2%)、「やや不満」「とても不満」は 0 名

Q2. 運営方法：「とても参加しやすい」78 名(65%)、「問題なく参加できた」41 名(34%)、「参加しにくい部分があった」1 名(1%)※、「参加しにくい」は 0 名 ※理由「Wi-Fi 干渉が悪く音声途切れた」(原文まま)

Q3. 自由記述：80 名(67%)が記述  
-----

参加者数は昨年度の 200 名を大きく上回った。さらに、内容に新規性があったこと、配信に関して昨年度の反省を踏まえキャリアバンクからの当日社員ボランティアを 1 名から 2 名に増員し環境を整えたことで、内容に関する満足度、運営に関する満足度が過去最高となった。

### ②サテライト会場における交流

対面参加者が集まるサテライト会場を交流の場として機能させるため、各会場に SHAKE★HOKKAIDO のメンバーを派遣するとともに、会場の集合時間をシンポジウム開始より 30 分早め、開始前に、SHAKE★HOKKAIDO メンバーの主導で、参加者が自己紹介をしたり、日本語学習支援に関する情報交換をしたりすることができる時間を設けた。また、札幌に比べ研修機会に限られる地域の団体のために、持ち帰り可能な冊子や教材なども用意した。以上の改善により、事後のアンケートにおいて、サテライト会場参加者の満足度が大きく上がるとともに、自由記述において肯定的な意見が数多くみられた。

### ③新たな取り組みの創出(1) 参加者の事後の行動

シンポジウムに参加した者のうち、2 企業、2 団体、およびこれから活動を始めたいという個人数名から SHAKE★HOKKAIDO に連絡があった。このうち、技能実習生を数多く雇用する千歳市の瀧建設興業株式会社については、3 月 9 日、3 月 30 日に SHAKE★HOKKAIDO メンバーが同社を訪れ、技能実習生および日本人社員の方と話し合い、今後技能実習生と地域との交流事業を進めることを確認した。さらに、帯広市、当別町の団体から SHAKE★HOKKAIDO にワークショップ実施の依頼があった。先述の通り、シンポジウム参加者には、事後当団体の活動内容をまとめた冊子を郵送しており、この内容が今回の依頼につながったと思われる。このように、回を重ねる中で、シンポジウムが、当団体が行う他事業へも波及効果を与えるようになってきている。また、当別町の個人より、8 月の当別町のイベントでパキスタンの方との交流ワークショップを行いたいという相談があった。(3)で後述するように、パキスタンの方との直接交流には注意すべき点があるため、今後丁寧に打ち合わせを重ねながら準備を確認した。さらに、江別市の高校教員より、パキスタン生徒が参加する授業を見学してほしいとの依頼もあった(5 月 19 日に登壇者のソバン・ファルーク氏とともに見学を実施)。このように、シンポジウムが、

道内で共生に係る活動を行いたい多様な立場の者がアクションを開始する契機になりつつある。

#### ④新たな取り組みの創出(2)「交換留学制度」

今年度は、地域間の交流促進に重点を置くため、先述の通りサテライト会場を活用した「交換留学制度」を以下の通り実施した。

- ・旭川国際交流委員会スタッフ→江別サテライト会場（江別国際センター）

旭川「留学生」は旭川国際交流委員会の職員として2025年1月から勤務し始めたばかりである。一方、江別サテライト会場を運営する江別国際センターは、市の国際交流団体の事務局職員4名で構成されている。江別国際センターの事務職員は、今回の「留学生」と立場が似ているが、4名とも10年以上勤務しているため、「留学生」の今後の活動において有益なアドバイスが得られるものと考え、旭川「留学生」を江別サテライト会場に派遣した。

- ・千歳市国際交流推進員・恵庭にほんごひろばサポーター→北見サテライト会場（いろはの会）

千歳・恵庭の「留学生」2名とも、2年前に文化庁のスタートアップ事業で立ち上げられた恵庭にほんごひろばでサポーターとして活動している。一方、北見サテライト会場を運営するいろはの会は、同じく市民有志のボランティア団体であるが、行政の支援を受けずに25年以上活動を続けている。スタートアップ事業の支援が終了した恵庭の団体が今後自走化していくための基盤を整えるにあたり、いろはの会の運営方法は参考になると考え、同「留学生」2名を北見サテライト会場に派遣した。

「留学生」を受け入れるサテライト会場には、懇親会の開催と活動現場の見学を依頼した。事後の聞き取り調査において、「留学生」3名とも、サテライト会場運営団体の活動内容はもちろん、その運営方法についても非常に勉強になったと話していた。また、今回の留学を通じ、今後活動内容について気軽に相談できるような関係性が構築できたと話していた。超広域自治体である北海道では、研修事業などを通じ道や専門家とつながる機会があっても、他地域の団体と顔を合わせて交流する機会は非常に限られる。懇親会を含め2日間と時間をかけて交流する「交換留学制度」は、「留学生」だけでなく、長く活動を続けてきた受け入れ側の団体からも、人的ネットワークの拡大および活動に新たな視点を持ち込むものとして非常に好評であった。「留学生」・受け入れ側とも市民レベルの団体であるため、今回の交流を、すぐに新たな活動の立ち上げにつなげることは難しいが、日々の活動を行う中で、様々な課題が生じた際、専門家ではなく、同じ目線で活動を行う他地域の団体に、相談ができる関係性を有しておくことは重要である。本「交換留学制度」は、地域の支援者間に顔が見える関係性を築き、各団体の豊かな活動の継続を支えるものとして、今後も継続していきたい。

#### ⑤新たな取り組みの創出(2) 江別市と浦河町の交流事業

事前に計画していたことではないが、江別市のパキスタンコミュニティに関わる者と、浦河町のインドコミュニティに関わる者が、シンポジウム後の懇親会や相互視察を通じ課題を共有する中で、合同の取り組みを行うという話が進んだ。具体的には、(i) 浦河町で母子支援を行う稲岡千春氏が江別市で子ども支援を行う団体と協働で取り組みを行うこと、(ii) 江別市でも活動するSHAKE★HOKKAIDOと浦河町・浦河高校が合同でインド女性のための日本語教室を行うこと、(iii) 江別市×浦河町対抗のクリケット大会を開催することなどを検討している。

#### ⑥シンポジウム成果の書籍化

本シンポジウムに登壇した北海学園大学の宮入隆氏、およびシンポジウムに参加した北海学園大学の湯山英子氏は技能実習生研究を専門とし、2022年に北海道新聞社より、北海道の技能実習生に焦点を当てた『お隣は外国人ー北海道で働く、暮らす』を出版した。彼らは、今回のシンポジウムを通じて、北海道の外国人住民の多様化を実感し、技能実習生のみならず北海道の在留外国人を広く取り上げる『お隣は外国人2』の出版を決定した。SHAKE★HOKKAIDO代表・平田は編集者の1人として、他メンバーは執筆者として制作に関わり、本シンポジウムの準備および実施を経て得た情報を書籍という形で公開する。

## ⑦SHAKE★HOKKAIDO メンバーの広がり

今回シンポジウムで取り上げた、日高地域の競走馬育成産業を担う浦河町のインドコミュニティは、以前より道内外の注目を集めており、メディアで数多く取り上げられてきた。一方、江別市のパキスタンコミュニティは、日本人に雇用されない自営業者が中心であるため、日本社会とのつながりが薄いことから、これまでその存在が可視化されていなかった。しかし、2024 年からメディアの取材が入り始め、その際、既に江別市で活動を始めていたSHAKE★HOKKAIDO が取材の窓口となるが多かった。その過程で、NHK 記者、北海道新聞記者がSHAKE★HOKKAIDO の活動に興味を持ち、メンバーとして加わった。さらに、メディア報道等を通じて活動に興味を持った株式会社北海道アルバイト情報社社員、札幌市で国際交流イベントを企画する個人などもメンバーに加わった。これまで同団体は大学の日本語教員が中心メンバーであったが、今回のシンポジウムを始めとする江別市での活動を通じて、メンバーの多様化が進んだ。

### (3) 得られた教訓など：

#### ①シンポジウムを通じた新たな取り組み創出のための工夫

1 の活動概要で述べた通り、これまでの3回に渡るシンポジウムでは、「地域を超えた交流から共生に寄与する新たな取組の創出」について積極的に取り組むことができていなかった。今回、「交換留学制度」を通じ、地域の団体間のより密な関係性を構築することができた。この関係性は、即時的に取り組みを創出するものではないが、地域の団体が連携しながら各々の活動を続けていく基盤となる‘長期的な種まき’として有効であったと考える。一方、今回のシンポジウムでは、参加者ではなく登壇者である江別市と浦河町の支援者間の交流から新たな取り組みの芽が生まれた。ここから、シンポジウムでの交流を新たな取り組みの創出につなげるためには、交流をする2者が、(i)活動において同様の課題を抱える者同士であること(今回の場合は新たなエスニックコミュニティが形成された2地域という共通点があった)、(ii)ある程度活動において決定権を持つ者同士であること(浦河町は町役場の方が、江別市はパキスタンコミュニティ当事者の方がいた)が重要であることが分かった。今後も「交換留学制度」を続ける場合、上記2点を踏まえた人選を行い、‘長期的な種まき’となる交流に加え、即時的な取り組みが生まれるような交流も促していきたい。

#### ②交流事業におけるエスニックコミュニティとのかかわり方

SHAKE★HOKKAIDO は、2023 年度にトヨタ財団の支援を受け、江別市のパキスタン料理レストラン（アンモナイトレストラン）にて、日本人市民と外国人住民間の交流を促すワークショップを実施した。その時にできたつながりをもとに、2024 年度から同レストランにて、アンモナイトアカデミーと称し、パキスタン市民を講師として迎え、日本人市民に対し、彼らの生活や仕事について紹介するイベントを行ってきた。この交流経験をもとに、今回のシンポジウム内容を企画した。先述の通り、2024 年に入り、このパキスタンコミュニティは外部からの注目を集め始め、各種メディアの取材申し込みがSHAKE★HOKKAIDO に入り始めた。浦河町とは異なり、江別市は積極的にパキスタン住民とのかかわりを持っていないため、取材のコーディネートは江別国際センターもしくはSHAKE★HOKKAIDO が担うこととなり、各々がかかわりを持つパキスタンの方に取材の依頼やマスジド見学のセッティング等を依頼した。しかし、メディアの報道内容がYouTube 等の SNS に挙げられた後、その内容に対して数多くの批判的なコメントが殺到し、一部の関係者にもメール・電話などの形で匿名の‘意見’が寄せられた。また、江別のパキスタンコミュニティを批判するYouTube チャンネルが立ち上がり、許可なくマスジドや会社を撮影しインターネット上にアップする動きも起きた。これに接したパキスタンコミュニティの中心的なグループ、特にマスジドの代表（イマーム）を核とするグループが日本人との交流に忌避感を持つようになり、1月31日のマスジド見学においても、イマームを始めほとんどのパキスタン男性は、見学者である我々との会話を拒否した。さらに、日本語が堪能であり交流に積極的なファルーク氏が、メディアの取材のため頻繁にマスジドに日本人を案内したことで、マスジドで大勢の前でイマームに批判されるという事態に至った。ファルーク氏はまだ20代

であり、また上記のレストランを経営する家族の息子であるため、江別市を離れることはできない。そのため、SHAKE★HOKKAIDOでは、2025年1月以降ファルーク氏に見学案内やコーディネートを頼まないようにし、中古車販売会社代表であるマンスール氏を活動に加えた。しかし、初期のメディア報道でファルーク氏が表に出たことから、今でも外部よりファルーク氏に視察や案内の依頼が入ってくる。

ここから、エスニックコミュニティとの交流のしかたについて以下の教訓を得た。

- ・特にブルーカラーの労働者を中心とするコミュニティでは、日本語が堪能ではない者が多く、大人よりも日本で学校に通った経験のある若年層の方が日本語が通じる可能性が高い。そのため、交流においては、10代後半から20代の者に通訳やコミュニティとのつなぎを依頼することになりがちである。しかし、つなぎ役は、日本人側、そして今回のように自身のコミュニティ側からも批判を受ける可能性がある。以上を踏まえ、交流事業においては、カウンターパートナーはコミュニティ内で十分な立場を持つ大人を含めるべきである。
- ・メディアのエスニックコミュニティに関する報道においては、日本人コミュニティからの反応を考慮に入れ、最初に取り上げる話題を入念に検討すべきである。江別市のパキスタンコミュニティについて最も早く取り上げたHTB（北海道テレビ放送）は、マシドの代表者らが土葬の問題について時間をかけて語ったため、その点に焦点を当て報道した。土葬問題は、パキスタンコミュニティにとっては宗教的な考え方が、日本人側にとっては土地の権利意識がかかわり、最も対話が難しい話題の1つである。実際に、関係者に寄せられた匿名のメールや電話のほとんどは土葬問題を批判するものであった。

#### **（４）今後の活動・フォローアップの方針：**

##### **①今後の活度に向けた資金調達**

これまでシンポジウムを4回実施してきたが、年々参加者が増え、また、共催団体・協賛団体も増加してきた。毎年1月後半の土曜日に開催を固定することで、毎年定例の冬のイベントというイメージが定着してきたと感じている。今後も開催を続けるには、活動経費を安定的に調達することは必要不可欠である。2（2）において書いた通り、今回のシンポジウム内容が北海道新聞社より書籍として出版されることになり、その話し合いを通じて、北海道新聞編集センターとのつながりが生まれた。6月にはSHAKE★HOKKAIDOメンバーで北海道新聞を訪れ、今後のシンポジウムの協賛団体となることを依頼する予定である。上述の書籍は、来年度のシンポジウム開催日に出版される予定である。次回のシンポジウムで書籍の広報を行うことで、シンポジウムに対する北海道新聞社の協力が得やすくなるのではないかと考える。

##### **②インドコミュニティおよびパキスタンコミュニティとの交流の継続**

今回のシンポジウムを通じ、浦河町のインドコミュニティを支援する者とのつながり、江別市・当別町のパキスタンコミュニティとのつながりができた。このつながりをシンポジウムのみで終わらせるのではなく、今後も交流事業を継続していきたい。今後は、2（2）において書いた通り、浦河町との協働事業を予定している。さらに、SHAKE★HOKKAIDOは、2025年も江別市のアンモナイトレストランを拠点とした交流事業を継続しているだけでなく、当別町立とうべつ学園を拠点としたパキスタン保護者との交流、アンモナイトレストランでの女性を対象とした日本語教室などを実施している。さらに、2025年8月3日には、在日パキスタンコミュニティの研究者、自動車流通の研究者を呼び、日本人住民に向けた研修会を実施する予定である。シンポジウムを一過性のイベントとして終わらせるのではなく、これを機に、江別市・当別町の住民間の交流やコミュニティ支援を継続していきたい。

### 3. その他(エピソード・感想・写真など)

#### (1) 活動中のエピソード・感想など

- ・2(3)で述べた通り、エスニックコミュニティとの交流で配慮が足りなかったことを実感した。
- ・SHAKE★HOKKAIDOに互いに面識のない新メンバーが入ったことで、団体の雰囲気が大きく変わった。この点について(3)で詳述する。

#### (2) 活動の写真



札幌配信会場で発表するソバン・ファルーク氏



登壇者間の懇親会の様子



旭川サテライト会場の様子



北見サテライト会場の様子



江別サテライト会場の様子



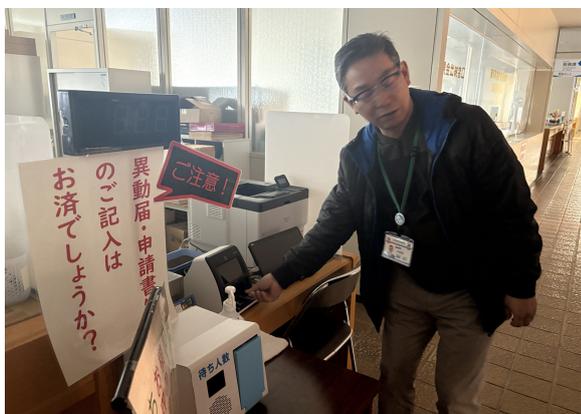
北見カーリング交流会の様子



1月31日の江別市視察（江別マスジドにて）



1月31日の江別市視察（中古車販売会社にて）



3月19日の浦河町視察（浦河町役場にて）



3月19日の浦河町視察（牧場にて）



3月9日瀧建設興業株式会社の技能実習生と

### （3）JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

#### ① エスニックコミュニティとの交流事業・支援事業の継続

2（2）および（4）で述べたように、同団体は今後もパキスタンコミュニティ、インドコミュニティとの交流事業・支援事業を継続する。今回の活動を通じ、これらの事業の基盤となる人的ネットワークが構築できただけでなく、2（3）で述べた通り、交流において配慮すべき点も知ることができた。なお、

今後、これらの事業を実施していくに当たり、よりコミュニティに関する理解を深める基礎的調査を行うため、今回のシンポジウムに登壇した東京外国語大学の栗田 知宏氏・澤田 彰宏氏とともに、2025年4月に、村田学術振興・教育財団の研究助成に申請した。

## ②団体の活性化

2(2)で述べた通り、今回のシンポジウム実施を通じ、メディア関係者や企業関係者など5名がSHAKE★HOKKAIDOのメンバーに加わった。新しいメンバーは、それぞれの現場で共生や交流に関する事業を行っており、情報交換の場を強く求めている。そのため、定期的に飲み会が行われるようになり、さらにその場に、互いが紹介したい新たな者を連れてくるという好循環が生まれた。これらのつながりから、5月19日には、新メンバーが企画したトークライブが実施された。同団体は、これまで大学の日本語教員が中心であったが、社会の様々な場で活躍するメンバーが加わったことで、活動の幅が大きく広がった。